

ロボットエンジニアの夢へ

今年度もたくさんの若者が実践技術者の門を開いた。当科の職員室は本館3階の端にあるのだが、4月頃の1年生は職員室に入室する際の挨拶（名前と相手の先生の名前と用件を言う）が初々しい。一方、電気電子工学実験という

実験レポートの作成や受理にコッがあると先輩達が口を揃えてアドバイスをくれる科目もスタートしていた。授業で習った理論をすぐに実験で試せる当短大のカリキュラム構成上、授業で習った理論を確実に理解しておかないと実験レポートを受理してもらえない。実験の日の放課後、最初の実験レポートを書き上げた伊藤君の入室挨拶の音が聞こえてきた。担当の先生のそばに近づき、「先生、今、お時間よろしいでしょうか？」と話し始めた。職員一同、社会人のような礼儀作法を心得ていると感心したのを覚えていた。その先生は我々と別な用件で打ち合わせをしていた

秋田職能短大 電子情報技術科

伊藤 翔さん（1年）

秋田職能短大との出会い

伊藤君が当短大の門を初めて通ったのは小学校5年生の頃である。目的は、おどだてロボット人財育成コンソーシアム主催のロボット教室に参加するためである。この教室は現在も続いているが、伊藤君は当時の思い出を「生まれ初めて初めてプログラムしたロボットが思い通りに動いたことに感動して、その後のロボット教室に積極的に参加するようになった」と振り返る。その年の2回目のロボット教室

が、すぐに最寄りのテーブルの椅子に腰を下ろし彼を迎え入れたのは言うまでもない。

写真1 ものづくり基礎実習で製作するライントレースロボット



写真2 クラスの仲間と最終課題のコースを研究する伊藤君（右端）

り具体的に「組込みシステムエンジニア」を目指したいと考えるようになり当短大のオープンキャンパスに毎年参加していた。に、ものづくり基礎実習という2年間に学ぶことのダイジェスト版にあたる実習を15年前から実施している。3年前までは伊藤君が小学生の頃に参加したロボット教室でも使われているレゴ社の製品を使用していたが、保守部品の生産中止等の理由により、当短大の実習設備である基板加工機という実務でも使用されている装置で作成した自作プリント基板に電子部品を自分の手ではんだ付けを行い、2つのタイヤと2つの光センサーを備えたライントレースロボット（写真1）を組み立ててプログラミングを行う実習を行っている。

ものづくり基礎実習

電子情報技術科1年生の入学当初の授業・実習はどちらかというと基本的な科目が多い。実業高校出身であれば、習得済みの内容も少なくない。そんな彼らが入学初期の夢を持ち続けていたが、モチベーションを保つための

最終課題への挑戦とこれから

小学生の頃に友人と競い合ったロボット教室での経験を活かし、ものづくり基礎実習の実習課題を伊藤君は確実にクリアしていった。最終課題に挑戦する頃には季節は初夏になっていた。別室に準備された最終課題の巨大なコース（写真2）をクラスの仲間と共に目にして伊藤君は次のように語った。「卒業する頃には、このコースを自由に走れるプログラムを書けるようになりたい」と。

こうして今年度の新入生も夢に向かって第1歩を踏み出した。1人でも多くの学生が夢をかなえられるよう、我々は応援し続ける次第である。

秋田職業能力開発短期大学校 電子情報技術科 講師 松田 晃太郎